

すべては信頼関係にあり

落語家・作家 立川 談四 楼

桂才賀^{かつたさいが}という修業仲間がいます。少年院への慰問千回という偉業を達成し、今なお自己記録更新中の落語家です。彼がなぜ慰問に血道をあげるのかはさておき、彼と同道した某少年院での落語会の話しましょう。

まず才賀が高座に上がると、拍手がありました。心からのものではありません。いかにも教官に強制された義理の拍手です。姿勢はいいものの、少年たちの目つきには敵意があります。大人をまるで信用してない、世の中を否定している目です。そんな中、才賀は自衛隊の厳しい規律について話します。そう、才賀は海上自衛隊出身、それも潜水艦乗りだったのです。

規律の中にいる少年たちは、才賀のより過酷な体験にビックリ。そこで才賀は、するりと話題を変え、カーレースについて語るのです。日本自動車連盟公認審判員でもある才賀の話に、少年たちの目は輝きます。彼らはおしなべてオートバイや車が好きで、かつては暴走族でもあったのですから。

話の中に、才賀はさりげなく、「出院したら……」などという言葉を挟みます。刑務所と少年院は違います。わたしたちはつい混同し、「出所」などと言ってしまふのですが、才賀は正確に「シュツイン」と言つのです。「おっ、このオツさん半端じゃねえ、わかっているじゃん」と彼らが思つのは当然です。これでツカミはオツケー。あとは才賀の落語に笑い転げるのみです。信じられないかもしれませんが、彼らはおそらく初めて接するであろう古典落語に笑つのです。

そのあと高座が上がったわたしの落語も大ウケでした。少年院で喋っているという現実を忘れてしまったぐらいで、まったく違和感なく落語会は終了したのです。すべては才賀が少年たちとの間に築いてくれた信頼関係のおかげでした。

才賀は少年たちとともに食事をし、芝生の上で車座となり、話をします。そこで

少年たちの本音が出ます。彼らは親についても語りますが、同時に教師についても語るのです。どんなひと言が嬉しかったか、どんなひと言に傷ついたかと。親や教師は彼らを見ているつもりですが、彼らはもとよく親や教師を見ているのです。彼らの話は大人にとって痛烈な言葉のオンパレードです。才賀はそれらを一冊の本にまとめましたが、その中に、「コミュニケーションのヒントがあると断言できます。わたしが好きだった中学のときの国語教師は、ちょっと変な人でした。教室がだらけると、突然漢詩を朗唱するのです。毎回ネタ？が違っていて、それは見事なものでした。わたしはその暗唱力に舌を巻き、たちまち畏敬^{いけい}の念を抱きました。意味はわからないものの、先生がその世界が好きだということが確実に伝わったのです。李白や杜甫、陶淵明などの名を知ったのもその先生のおかげで、亡くなりましたが、その朗々とした声は今でも耳に残っています。わたしはその先生に憧れ^{あこが}、なんとか振り向いてもらいたいと思い、当時ハマりつつあった落語の中で唯一覚えた「寿限無^{じゅげむ}」を披露しました。「よく覚えたな。そのスピードはオレには出せん。」先生はそう褒めてくれたのです。ああ、あのひと言のなんとわたしを励ましたことでしょう。どうか先生方、生徒との信頼関係を築いてください。そして何か一つ、生徒の心をつかむことができる飛び道具を修得してください。健闘を祈ります。

『子供を叱れない大人たちへ』(実務教育出版)

立川 談四 楼 (たてかわだんしろう)

一九五一年生まれ。一九七〇年入門、一九八三年、立川流落語会第一期真打になる。落語界の将来に疑問をもち、そのことを書き綴った処女作『屈指13年』(別冊文藝春秋)で作家デビュー。著書に、『シャレのち曇り』(文藝春秋)、『師匠!』(新潮社)、新刊『煮ても焼いてもうまい人』(エイ出版社)など多数。TV・ラジオの出演、新聞・雑誌の連載など、幅広く活躍。